



榊葉

会報「榊葉」第一号
 昭和42年8月1日 印行
 発行者 岡野 俊文 彦
 編集者 中野 幸彦
 発行所 津市広明町
 三重県神社庁内
 三重県神道青年会

一条天皇の御代 我が国
 上代以来の神明奉仕の大精
 神を根幹として作られたも
 ので、今日、宮中、神宮な
 どで舞われている。
 手には御鏡に擬した白い
 輪のついた榊を持ち神楽歌
 につれて舞われる。
 (神宮神楽殿にて謹写)

人長舞

榊葉

撰名の由来

初代会長
 神宮禰宜 宇仁一彦

(本歌)

榊葉の香をかぐはしむ求め来れば
 八十氏人ぞまどるせりける

(末歌)

神がきの御室の山の榊葉は
 神の御前に茂りあひにけり

宮中賢所御神楽の儀の、採物「榊」
 の歌詞である。神宮の神嘗祭の御神
 楽にも奏される。

本歌は、榊の葉の何とも言えぬか
 ぐわしい匂いが漂ってくる。どこか
 ら来るのだらうと、求めたどって
 来たら、大勢の氏人が神前に集って
 神楽を奏しているではないかという
 意、末歌はもはや説明の必要はな
 い。

神道と榊、神社と榊とは切り離せ
 ない。

荒木田守武神主にも

行きかへり祈る朝宮夕宮に

袖の匂となれる榊葉

という連歌がある。

この機関誌は、三重県神道青年会
 員が御神徳をしたって集り、融和一
 致して、斯道の発展を論じ語りあう
 場であるから、「榊葉」とした。

祝辞

神宮大宮司 徳川宗敬

三重県神道青年会が発足して本年で十八年になる...

祝 発 刊

本社本庁事務総長 三重県神社庁長

林 栄 治

三重県神道青年会が、この度機関紙を発刊されると聞いて...

の機関紙を持つまでに到った努力に本当に敬意と祝意を表さずにはおれません...

会報創刊に当って

三重県神道青年会 岡野倭文彦

多年待望久しかった私達の会報が初代会長であった神宮彌宜宇仁一彦先輩の御努力により...

育まれた欠陥を是正し、その展開の上には現代の新しさも臨機応変に取り入れ、現今の急務たる神宮式年遷宮・明治維新百年の諸行事を通じ、悠久なる神道の発展の歴史の上に大きな礎を確立しなければなりません...

現下の我が国内外の重大な時に当って、世界史・国史の中で注目される明治維新の推進母体となった青年志士達の活躍を精察して、私達はそれを参考として現今の斯道のため奮起しなければなりません...

上述の点より明治維新を見ますとあの青年志士達は熱血の意志と行動をもって直進すると共にある時には鋭利な洞察と決断をもって転進をなして居ります...

考へられる。然し氏子青年会は既に自立自営の運営を続けられて、立派な成績を示しつつあり、当神青協の皆さんの強い協力を要請されてはいるが、これは必然的に未永く続く、兄弟関係としての相互関係であるから、今後指導協力を仰がねばならぬのは勿論でありませうが、全く氏子青年会として面目を一新しつつあることを見逃し得ない。

今日まで兎角に、本社本庁の役員の間には、神道青年会のあり方について批判のあったのは事実であります。それは発足当時の目的事業の性格上から生れたものであると考えられ、氏子青年会も既に独立して、本社本庁の指定団体となりまして以上、神道青年会も同じ、本庁の指定団体として、本来の真姿を顕現して頂くべき時期にまで発展されていると思はれるのであります。

三に私達は斯道の理論の虫であってはならないのであって、斯道のための実践の士でなければなりません。それには強大なる同志の結合が必要であって、私達は当会員同志の一人でも多き獲得と使命観をもった同志の育成に努めると共に、その上に氏子青年の皆様の協力態勢の確立に精進しなければなりません。

お木曳に奉仕〔伊勢〕



神宮式年御遷宮の御用材奉仕は伊勢の神領民のみに許された行事であったが、此度のお木曳行事には広く全国からの奉仕が許され、一日奉仕団、一日神領民として第二次にも数千名の参加奉仕者があつたが、昨年引続き、神道青年全国協議会・全国氏子青年協議会も三重県を含め四百名が奉仕した。

- 当県奉仕者次の通り
岡野倭文彦 神田信忠 片岡昭雄
中野幸彦 松永栄木 喜田川忠之
遠 豊雄 篠田 洪 服部一之
小串重彦 河村士郎 矢野憲一
植木貴信 大宮益壽 神津幸通
中井正晴 神 守男 辻村彰夫
高柳武司 藤井昭彦 浦田正克

上記の私達の自覚と気魄の指導・発展・研究・意見交換等の場としてこの会報を活用して行きたいと思つて、そしてこの会報はその名々神葉々の如く斯道・本会・本会員を互生するものとなる様、今後とも皆様の格別の御協力と御援助をお願いして、創刊の御挨拶に代えたいと存じます。

国の同朋と共に奉曳本部の奉曳車に御用材を高々と元氣一ぱいの奉仕。お木曳車のきしむ音は綱に伝わり、それぞれの心の奥深く伝わり、お伊勢さまへの直かの御奉仕にまたとない光栄に酔いしれた如く、曳く綱も度々大きくゆれ動き、どの顔も汗を拭ういとまもなく喜びに感激。前夜には神宮会館に全国から集った神青、氏青会員が前夜祭の集いを催した。当県がその受入につき神青氏青共歓迎の意味で全ての準備に当り、岡野神青会長藤波氏青会長らが陣頭指揮に当り、遠地からの参加者の一夜をなぐさめた。

戦後二十年から既に二年目になり神社本庁は今年丁度設立二十周年を迎えた。

神社と国家との絶縁指令であった神道指令と、戦時中の反作用として抬頭した反神道の思潮を、ともかくもくぐりぬけて、神社は現在一応の復興と安定を見るに至った。

これは過去に経験したことのないほどの生活基盤の変容である。経済成長と産業構造の変革に伴う社会構造の変化、科学技術の進歩、消費革命に基因する意識革命、われわれは、この新しい波に追いつかれて、いや応なくその適応を迫られている。

このような社会的変貌の中で、地域主義に立つ氏子制度をとって来ている神社が、大きな影響を蒙らずにすむということは出来ない。経営論的に見て、一つは神社の公的制度的再検討、今一つは避け難い社会的変容に対応する所謂神社の近代化、この二つが回答をまつているのである。

○ 自分自身を凝視しよう
神社の制度的手直しの問題は一応

別として、神社の繁栄と神道の興隆をめざすために、より根本的な要件は神社の体質を改善することにあるが、この体質改善を更に押しつめれば、神職自体の問題に還元する。極言すれば、神社の存立と将来性を決定するものは、制度であるより、要は神職にその人を得るということ、自覚をもった神職、使命感にあふれた神職が一人でも多くなるかならぬが、神社の今後の運命を決定するといふわかりきった提題に帰着させるを得ない。

Table with 2 columns: Title '青年神職とともに考えたい' and Author '神社本庁教学部長 庄本光政'

動史と数多くの業績を重ねて今日に至っている。しかし、氏青協が結成されてから以後の神青協は、その性格について改めて反省と検討が加えられなければならないと思う。一口に言っても、それは氏青協を育成するためのよきコンサルタントであり、よき協力者であるといふ機能である。

○ 神社の公共性と宗教性
神社のもつ公共性と宗教性とは神社固有の二面的性格である。神社には、この双方の性格がうら合わせに内在しているのである。

あるという強い自意識をもって、立ち上ってみたいということである。神社界の将来の鍵は青年神職の手の中にあるのであって、断じて老年神職の側にはない。このような自負と誇りとを真実で自分のものとするために、私は青年神職諸兄に提言したい。研究と取組を要請したい。

現状を見ると、青年神職は本社が別として一般的に専従者が少ないことは大きな隘路であるが、こういう隘路の是正または克服の対策を、先づ神青協自体の緊急日程として真剣に取り組んでいただきたい。

○ 若いゼネレーションへ
最後に私は、現在の神社界にとつて最も欠けていることを、青年神職の諸兄にお願いしたい。それは若いゼネレーションへの呼びかけということである。

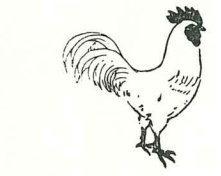
才六十回神宮式年御遷宮奉賛運動を展開しよう

垂仁天皇二十六年 皇紀六五七年、西暦紀元前四年、伊勢の五十鈴川の川上に天照坐皇大神の御鎮座をおむかえて爾来今日まで伊勢の神宮はその広く尊い大御恵を国民一人一人に垂れさせ給い、また、われわれもその祖先も二千年にわたりと生ける者誰もが天地の恩恵を大御神様のおめぐみと慕い尊んで、今なおその御光を周れく四方に輝かせ給える神宮に、今日歴史を綴るが如く第六十回目の式年御遷宮の諸祭典が御開始になっております。

御遷宮のこころ

宮ではこれを二十年と定め、神宮の数多くの祭典の中で最も重要で尊く最大の祭とされており。神宮をわれわれの総氏神として常に仰いでいるとすれば、この神宮の式年遷宮の祭は日本の祭の最大の祭なのであります。その要する年月は、最初の山口祭に始まり遷宮祭の終るまでなんと八十年の歳月を要して行なわれるのであります。

日本の最大の祭であるということ、は譲って考えてみれば国民全てが伊勢の神宮に心を寄せ、あるいは身を寄せ歩を進めて、何びともがそのおまつり気分にあふれるということであ



特に公共性の要素は、その土地の氏神社や産土社として地域社会集団に深いつながりをもっており、基礎に立っている。共同信仰という構造上の部落神からなると、伊勢の神宮のように最高度の国家性を有するものまで歴史的に形成されたその公的内容には、質的、段階的相異がある。しかし、公共性があるために、宗教性が排除されなければならないと二律背反的に窮屈に考えることはまちがいであります。

神社はそれぞれ祭神や一社の縁起によって、神徳の示現にはちがいがあっても、神社が一律に日本民族の本有的信仰の具象化されたものであることにほまちがいがたい。ここに宗教的活動展開の源口がある。村祭りといわれる共同信仰の型はたつとものであるが、個人化の傾向が顕著である今後の日本社会では、神社は伝統的な祭祀を守りながら、同時に人間個々の生き方にかかわりをもつ信仰指導へも積極的に乗り出さねばならぬ。これがその方法論をも含めて、神社の体質改善の中心課題である。

最後に私は、現在の神社界にとつて最も欠けていることを、青年神職の諸兄にお願いしたい。それは若いゼネレーションへの呼びかけということである。神社総代は、神社の護持、経営上の直接の必要から、今日漸を追ってその充実が必要で来ていることはよくこぼし。問題なのは、近年、成人して社会に出てくる夥しい国民層との交渉である。戦後の学校教育と社会的風潮の中で育って来た今の若いゼネレーションは、概して神社に無関心な人間として育って来ていることは否定出来ない。これは神社の今後の死命を決定する大問題である。勿論このような現象は、神社だけにかかわる問題だということではないが、ただ要知として無策のまま見送っているのでは、状況の改善はありえない。他の宗教団体を見ても、近來この点に関する着眼とこころみが見え、行われる機運にある。神社が若い人々の精神的な拠点になり、若いエネルギー発散の場となるような工夫に、われわれは更一段と急がねばならない。神社の森からひびいてくるものは太鼓の音だけにかぎらない。少年少女の若々しい合唱の声であってほしいわけである。それは青年神職のフレッシュな呼びかけと接触とが何より効果的である。何か、段々と老化して行くように思われる神社の若返りには、何はあっても若い生命力を神社に導入することである。



親馬鹿の願い

神宮会員 矢野憲一

四月に父親となった。まだ十七日目である。何とも妙な気がする。名前は五十鈴と付けた。寝むりふけて赤子を見てみると、この子の時代の日本は、いかなる状態になっているかと考えさせられる。神道はどうなっているであろうか。

娘になる頃には遷宮が近づいてくるだろう。この子も奉仕するであろう。嫁入りする頃には遷宮が近づいてくる。その頃はいかなる時代となっているだろうか。良かれ悪しかれ変貌しているには違いない。それは我々の力にかかっている。我々が責任をとらねばならぬ問題である。いつの時代に於いても同じであろうが、今後の十年廿年は真の意味でむつかしい時代となるだろう。現在の青少年は神道の知識は誰れからも教えられていない。神については無知である。しかし関心はある。珍らしいもの知らないものに対する好奇心

だけである。仮に私が神主にならず他の道に進んでいたら、私も一般現代青年と同じであろう。神宮で参拝者と接していると、腹立たしくなることすくぶる多い。何と青少年を主として無知なること極まりなきことか。

無知なら無知でよい。観光なら観光でもよい。しかし無知なるがゆえの好奇心と神の冒瀆は腹が立つ。観光の為に見物に神宮に来るのは現状ではいたしかたない。現に我々が奈良や京の古きお寺やみ仏を尋ねる、真に参拝のためと云えるだろうか。

観光という聞こえがよい。見物では聞こえがわるい。見学では小学生のようだ。古き言葉の物見遊山がぴったりだ。拝観という便利な言葉もある。参拝と観光とミックスしたもともらしい言葉だ。私も仏像を見るのは好きだ。仏像は美術品として見るより謙虚な心で拝み見ると微妙に表情が変化する。

仏としての仏像は拝観出来るが、神々を拝観することは出来ない。ただ拝観し自づから心の神に感じ観るのだ。それには宗教体験をつむ必要があるだろうが、その体験の基礎教育もなされない現状では、心のふるさとを訪れても空しく帰る人

が多いのは残念だが仕方ない。我々はそれを空しく見てはだめなのだ。切歯扼腕しつつ我々が出来るかぎりの努力をせねばならぬのだ。腹立たしいのは、その無知と好奇心につけこんで誤まると観念を売りつけることだ。

その一例はカッパブックスの「日本の神話」だ。これはベストセラーとなっている。いやなっているというより、広告によりベストセラーに作られたものだ。諸兄も読まれたことと思う。私も本屋で立読みした。十分ほど斜めはすかいに読んだというより見た。面白かった。日本神話を面白オカシクすべてセックスに結びつけて書いてあるのだから面白くなるはずがない。戦前の神話は尊厳ではあったが、子供にも親しめ面白かった。神々はあまりにも神様のであった。しかし現代はあまりにも人間的でありすぎる。

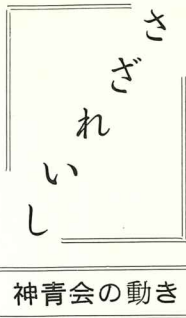
「日本の神話」を読む青少年の姿を考えるだけで、私はゾッとする。あれはむしろエロ本に近い。あの観念でもって神々に接するとき、いかに石田梅岩が「我國の神明は馴れ親しみ近づくとを以て本とす。遠ざくを

以て不敬とす」(都鄙問答)と云ってはいても冒瀆であろう。あれが日本の神話だと思いきや、あれが日本大変なことである。青少年には読ましたくない。はずかしい。

私が小学生の頃に読んだ日本神典古事記断という本が手元にある。大正九年発行だから父の子供の頃読んだものだろう。総ルビが付けてあるから小学生でも読めた。なつかしい。著者波川支耳のはしがきに「櫛の火に光る土間の味噌壺醬油壺を指さして「あゝいふ風に八個の酒壺を列べて、其陰に素戔鳴尊はじっと待つてお出になつた……」と大蛇退治の話に、小さな拳を握ったのも、もう昔となり父も母も黄泉の人となられたが、今もあの頃に注ぎ込まれた物が残って居る様な気がして」と書かれている。

伝統に生きる神話の正しいおおらかな姿をこのあどけなき子の時代にも継がしたい。それは我々の責任である。新米おやじは子供に弱い。友人の親バカぶりを笑っていたが、どうも私も親馬鹿ちゃんりんになりそう。それだから、なお一層にこの子供達の時代を良き時代にしたと願う。

神青の諸兄、どうか我々の子供達のために心を奮いおこそうではないか。



神宮の古殿地

清掃奉仕

神宮の式年御遷宮お木曳とともに懇々その意義が国民全般にゆき渡りつつある今日、私達三重県神道青年会としては神宮の御鎮座地元県として、常日頃その恩恵を身近かに蒙っており、誠にありがたい極みであります。

報恩感謝の意味で神宮清掃奉仕は当会の年次計画のうちでも主要な事項であります。本年も初夏の日ざし強く目の青葉も濃くなつて来た五月二十一日実施いたしました。

さつき晴の空に御正殿の千木が高くそびえ、御神域にはあちこちにお木曳の各町奉曳団の木やり音頭がのどかに響く中に、会員一同衣服を整え目前に追った次期御遷宮用地の古殿地に至った。清掃の行きとどいた域内ながら初夏のこととて雑草も多く御本殿に向つて一列に並んでの奉仕、手にしている竹の目かごの中も次第にその量が増してくる。かすかに玉石の音のみが聞える静寂の中、額の汗をぬぐう間もいとおしく真剣に奉仕に専念。警衛課の一室を借りて風食、作業のあとの食事のこととおたがいに

舌つつみをうち、しばし談合の後再び奉仕、午後三時まで行い大きい成果を残して終了した。

作業中宇仁彌宜(本会初代会長)のお見舞をうけ感激。終って一同御礼の参拝、神楽殿の応接間で宇仁先生のお話などを伺いながら一晩つ出されたお抹茶の味はえも云われぬ美味しさ、のどのかわきをうるおわせ、一同晴々とした清しさでお礼を述べ御神域をあとにして内宮前で解散。

当日の出席者次の通り
岡野俊文彦、神田信忠、河村士郎、松永栄木、遠豊雄、中野幸彦、喜田川忠之、田中雄昌、小串重彦、篠田洪、木平八郎、藤井昭彦、日高輝和

神青協副議長に

岡野会長

本会の活動は神青協でも大きく認められていることは先輩諸兄の築いてくれた力が大きいところでありますが、岡野会長の指導力は神青会今日の発展の大きな要因でもあります。

去る五月十四日神道青年全国協議会の年次総会が東京で開かれ、当県から岡野会長、神田副会長が出席、役員改選の結果、三重県神道青年会前会長山本隆三の後任として現会長岡野俊文彦君が全国協議会の副議長に選任されました。

本会としても誠に名譽なことであり、会発展の意味からもプラスであり、その活躍が期待されております。

東海五県 神道青年連絡協議会

五月八、九の両日静岡県、久能山東照宮を会場に開かれ、岡野会長、中野理事の二名が出席。全国総会の五県提案議題の討議等あり、当県提案の「第六十回神宮式年御遷宮の奉賛活動を展開する件」を採択、五県共同提案として全国総会に当番県の静岡神青会より提出されました。

更に昨年愛知県より計画発表のあった明治維新百年記念行事として、五県神青、氏青の集いを持つとうとう。明年三月、名古屋市中で開催の準備委員会は、後日静岡県で開く旨承認された。

藤波孝生氏青会長

衆議院議員に当選

今年一月に行なわれた衆議院議員総選挙に本県氏青青年会長として発足当初より今日に至るまで碎身の努力をおしみなく発揮され、他県の模範として注目されるまでに発展を見るにまで至らしめ、会員のよきリーダーとして活躍されている藤波孝生氏は三重県議会議員から更に国会議員に三重県第二区より立候補、藤波氏の濃厚篤実な人柄と若い世代の代表としてのリーダーシップ的存在として選挙中常に多くの有権者の支持のもとに、一月二十七日の投票の結果目出たく当選され、全国の氏青会員として勿論初の国会議員となりました。

新居遠一君

上野市議に当選

更に会員新居遠一君は本会理事として活躍されておりますが、今春の統一地方選挙の上野市議会議員選挙に、新居君の地元氏子を始め多数の方々推挙により立候補され見事に初当選されました。誠にお目出たい極みであり神社界を通じて若い世代の代表としての活躍を期待するものであります。

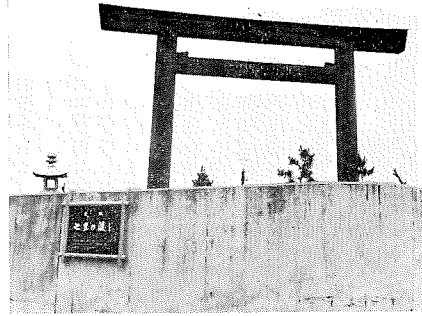
選挙中に現地にマイクを持ち選挙戦で激しく有権者に訴える新居君を会長以下役員一同で陣中見舞かたがた激励に向きましました。



郷土の明治百年を訪ねて

(一) 〔桑名市〕

明治天皇の式内社奉幣をたずねて



皇大神宮御下賜
宇治橋鳥居(七里の渡し)

わが国が近代国家に生まれかわり欧米の文化を受け入れて現代文化を成立させた中にも日本の美しい伝統を生きとよみがえらせて、今日の日本の基盤となった明治維新の歴史は、われ／＼日本人の心に悠久の民族の自覚を呼び起してくれるものがあります。

この維新の歴史の中で明治天皇が明治元年の東京行幸に際し沿道の式内社に官幣使を遣わされて奉幣され同二年御東幸の際には神宮に御参拝になり伊勢路の沿道の式内社に官幣使を遣わされて奉幣されたことは、

天皇の敬神崇祖の念の篤さをうかぶ一事としてよく知られておると思えます。

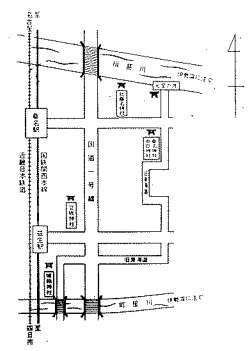
明治百年を迎えるにあたり、この式内社をたずねるのも意義あることと思つて、身近の桑名市内の奉幣神社について御紹介申し上げることにします。

この光栄に浴した式内社は、明治元年九月二十五日桑名神社、中臣神社、佐乃富神社(北桑名神社に合祀)の三社で植松権少将が官幣使として奉幣され、同二年三月十五日には長倉神社(城南神社に合祀)、立坂神社の二社に亀井中将が官幣使として奉幣されたものです。

○桑名神社(桑名市三崎、元県社)
中臣神社

古くからの桑名の町の中心、旧東海道に面して御鎮座になり、桑名の町の総鎮守であるので両社を併せて桑名宗社とも称し、明治天皇御東幸の際、内侍所奉安所が置かれるなど一段と御東幸にゆかり深い神社です。

江戸時代、幕府、桑名藩主の崇敬殊に厚く、その一例を挙げれば幕府より年々御朱印料の奉納があつたことなど当時の御社柄をうかがうことができます。また社前には、勢州桑名に過ぎたるものは、ク、クと歌われた県文化財の青

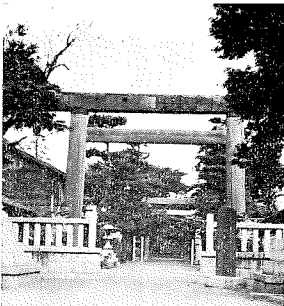


銅の大鳥居があり、有名な石取祭は桑名神社の大祭比与利祭より二百年程前別れたもので、古くからの石占神事に根ざしており、社前には氏子各町より旧東海道安永の町屋川原の石が奉納される慣わしです。

○北桑名神社(桑名市堤原、元村社)

この神社に合祀の佐乃富神社に奉幣になったもので、古くは佐乃富神社は旧東海道に近い宝殿町に御鎮座になっていたので、宝殿さんとも呼ばれていた。

○城南神社(桑名市安永、元村社)



皇大神宮御下賜一ノ鳥居
(城南神社)

桑名の南、安永に旧東海道に東面して御鎮座になっており、この神社に合祀の長倉神社が奉幣に預つたものです。古来安永の地には

西宮と称する長倉神社と東宮と称する神明社があり、明治四十一年長倉神社をはじめ村内の村社が東宮の神明社に合祀になり村名を冠して城南神社と改称になったもので、この社地は倭姫命が桑名野代宮より南勢へ御遷幸の途中暫時御停座の御田地で故に神宮式年御造替毎に古例に従つて古殿の一部古鳥居の御下賜に預つております。

○立坂神社(桑名市矢田、元県社)

多度神社、桑名神社と並んで藩主の崇敬厚く、境内に駒繫松があり、奉幣を喜んで当時の桑名神社の神主鬼島広蔭が詠んだ次の歌が社蔵されておりです。

立ち栄ゆらめ神の社は 広蔭
同社前より約三百メートル南、矢田町へ出ると旧東海道の町並のおまかげもみられます。

また明治天皇のお通りになられた桑名の旧東海道には神宮より式年御造替のたびに古例に慣つて古鳥居の御下賜に預る桑名神社に近い川口の七里の渡しと町屋川に程近い安永の城南社とがあり、共に数百年に亘つてこの伝統が受け継がれており、倭姫命の御遷幸の際桑名野代宮が當られたこと、壬申の乱には天武天皇社が奉斎されておられ、桑名の町より南方の地域が神戸郷であつたことなどと思ひ合せて、神宮、皇室とのゆかりの深さは、桑名の歴史の古さを物語るものと言えましよう。

松永栄木記